

図3. 市町村実施検診カバー率 一肺がん，男女計一

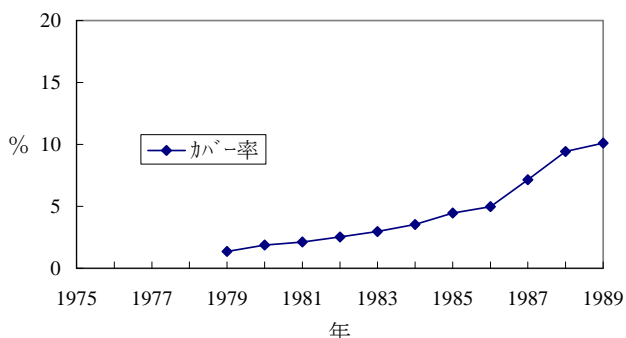


図4. 1975年の年齢調整率に対する率比 一肺がん，男一

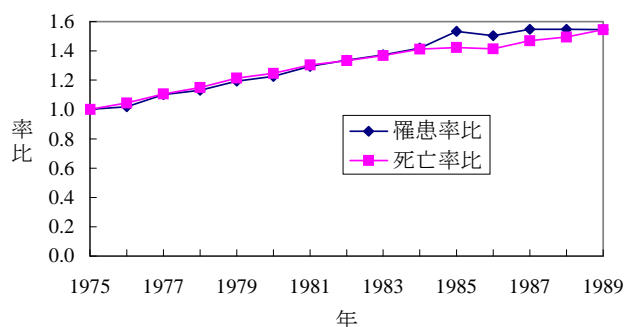


図5. 日消集検学会全国集計による検診受診率 一大腸がん，男女計一

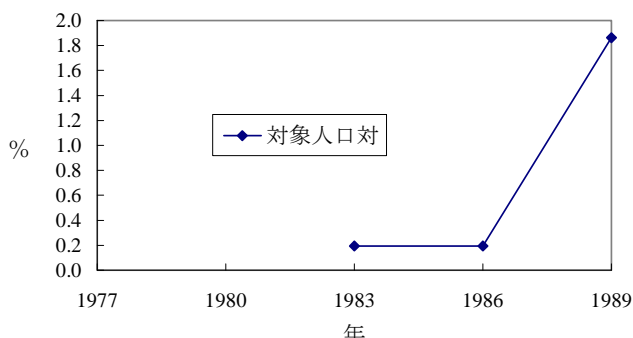
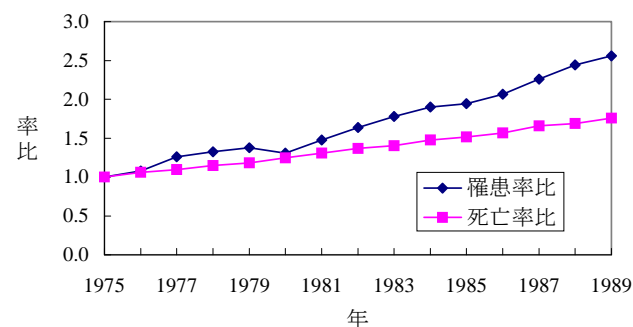


図6. 1975年の年齢調整率に対する率比 一結腸がん，男一



では、老健法による検診の導入（1982年）以前（1980年頃）から、罹患と死亡との乖離が始まっていた。なお、罹患と死亡との乖離には、臨床面での進歩も関与していることに留意されたい。

これらの成績から、検診の効果について、直ちに結論づけることは難しいが、少なくともがん検診の種類によって効果に差のあることは、明らかである。従って、登録を行っている府県では、こうした図を常に用意していることが、がん検診の効果を考える上で重要である。

使用した1985-89年の全国罹患率推計値は、厚生省地

域がん登録研究班（花井班）の平成5年度報告書による。また、ここで述べた平成8年度の老健研究班（藤本班）の報告書は、今年、希望の登録室に配布の予定である。

なお、上述の研究では、次の先生方のほか多くの方々
の御協力を得た。深謝する。高野 昭、深尾 彰、
佐藤幸雄、山崎 信、大島 明、石田輝子、津熊秀明、
花井 彩、黒石哲生、辻 一郎、松田徹、村田 紀、岡本直
幸、犬塚君雄、味木和喜子、馬淵清彦、早田みどり、
村上良介。

編集後記

昨年11月の理事会でNEWSLETTER刊行が決まりました。当初の目標から2カ月程遅れましたが、広く、がん登録業務に携わっておられる皆様との交流の場ができましたことを創刊号の編集の任にあたった者として大変うれしく感じています。

まず、ご多忙の中を、寄稿して下さいました諸先生方に、心から御礼申し上げます。

本協議会顧問 国立がんセンター総長阿部薫先生からは、日本のがん登録も国家的事業として扱われるべきものであるという位置づけをいただくと共に、精度、即時性を高め、法的整備を進めるべきことを御指摘戴きました。努力しつつある者にとって、心強い励ましを頂戴したと考えています。

トピックとして、本号では、Bailar 博士の講演を津熊先生

に解説していただきました。

編集には2人とも経験がなく、パソコン自由自在というわけでもなく、いろいろな意味で限られた紙面構成となりましたが、最初の試みとしてお許し下さい。

次号以下の編集についてのご注文、例えばトピックに取り上げるべき主題、依頼すべき先生についての御意見などを、会員の皆様からお寄せ下さるようお願いいたします。

また、「Q & A」の紙面を次号から作りたいと考えていますが、これに取り上げるべき質問を、随時、協議会NEWSLETTER編集委員宛、郵便又はFAXにてお送り下さい。

編集委員：花井 彩（地域がん登録全国協議会）
藤田 学（社会保険勝山病院）